２０１９．８．７
畑　啓之

ＳＡＬＴ（戦略兵器制限交渉）を連想　Ｓａｌｔにショックを感じた減塩の話

本日のブログはいささか日記風にはなるが、久しぶりに衝撃を受けた話である。

本日はデパ地下で家内が夕食を買ってきた。店名がレンズの焦点距離を求める公式に似ていると私がそう思っている有名なお総菜屋であり、食卓に並べられたディッシュには色鮮やかに料理が盛り付けられた。野菜はいかにも新鮮な緑色、エビチリはソースの中に生き生きとエビが泳ぎ、ローストはまさに今焼かれた風であり、なかなかに食欲をそそる。このような色彩に満ちた料理は久しぶりであるように感じた。

ところがである。一口、口に入れるとなんとそのしょっぱいことか！　本来私は非常に薄口を好むので、この店の商品がきっと私には合っていないのでは、と感じて正面を見やると、なんと家内もそのように感じていた。実際に味がとてもしょっぱいのである。夏であるから、食品の鮮度を保つために塩分濃度を高めているとも考えられるが、それにしてもしょっぱい。一口一口がだんだん苦痛になってきて、ついにはギブアップである。

この食事は、久しぶりに私の記憶に残るものであった。食事をしながら、ＳＡＬＴ（核兵器制限交渉）なる言葉が頭によぎるほど「制限」という言葉が頭を突いた。世は減塩である。確かに、一般市販食材はおいしくなければ、そして、鮮度が保たれていなくては売れないかもしれないが、基本は健康第一である。この一食限りでは健康を害することもないであろうが、この一食の積み重さが知らぬ間に健康を害していく。惣菜店も顧客の健康に留意していただきたい、と感じた本日の夕食であった。